

# 第五章

## 贈る言葉



## この純なるもの

アメリカの未来学者、ヘンリー・ステイルは、『人間これからの三十年』という書物の中で、次のように述べています。

「三十年後には、宇宙服を着て、月のクレーターでダイヤモンドをさがすが、ジェット機仲間のもっとも一般的なスポーツになるだろう」。

遠いかなたに、美しいもの、シンボルとしてあった月に、どんな宝物があるかは不明ですが、三十年後には、私どもも月に旅行し、月の石を見、その中に秘められているダイヤモンドを発見できるかもしれません。それまで生き続けたいものです。

うららかな陽春の訪れとともに、暁星学園幼稚園も創立二年め、新しい学年をスタートさせた喜びは大きい。三歳から五歳までの百七十名の幼児の元気でいきいきとした生命力、日ごとにのびていく姿に、新鮮な感動をおぼえます。筆舌につくしがたい充実感、満足感を味わっています。

月の世界ではなくとも、私どもは、この神の傑作としての、神秘的な存在である人間——幼児たちの中に、はかりしれない宝物を発見できます。かれらの態度、ことば、そして汚れを知らぬ顔、じゅんぽくそのものの心は、美しさに輝いています。私どもが指導する前に、この子どもたちは、おとなである私どもにたくさんのことを教えてくれます。この限らない宝庫である幼児たちに接して、その中に秘められているタレントをひき出し、善き人間に成長させることが、指導する者たちにとっての最大の義務であると信じています。したがって、先生がたは全能力、全才能を結集して保育に専念していただきたいと思えます。

暁星には、暁星の伝統があり、個性があります。その伝統・個性を最大限にいかして、ここにつどうすべて

の人々に、暁星の香気を感じさせるような美しい学園にすべく努力していただきたいものです。

(一九七〇年四月十七日幼稚園会報「エトワール」)

## 信念こそ美果を産むもと

はじめに——反省と感謝を

月日は容赦なく過ぎてゆき、希望の中にスタートした一学期も、まさに終ろうとしています。

隣接のプールに、新鮮な水がみなぎり、みなもを渡る風がいちだんと強烈に光るころともなると、やがて、楽しい夏休みが訪れてきます。すず風につつまれて園児たちの眼は生き生きと輝きます。

三歳、四歳、五歳の園児たちは、この三か年間、楽しく幼稚園に通い、子どもなりにさまざまの体験を積みました。彼らが共同生活を通して、しだいに個人的生活から脱却し、規則という愛の掟に気づき、他人の存在をも認めて、愉快に暮らし、たくましく成長し、向上してゆく姿は、私どもにとつて、限らない喜びであり、大いなる責任を感じずにはいられません。

一学期が終わる前に、私ども一人ひとりが、一学期になした努力を反省し、美果の収穫を喜ぶとともに、不足の点、いたらないところを補う研究と修養に努めねばなりません。そして、使命の遂行にまいしんできたことに対して感謝の念を新たにしつつ、楽しい夏休みにはいつてゆきたいと思えます。

瘦せたソクラテス——心に火を、信念を持って前進を

親切心があって、貧乏な人にお金を喜捨したくとも、そのお金がなければ他人を助けてあげられません。自分が燃えていなければ、他人の心に火をつけることはできないのです。

すべての人間は、その長い生涯において、何度か苦境に立つときが必ずあります。きょうこれだけのお金があれば、あすから工場の火が消えるということもあります。このような危急存亡のときに、助けてくれる人は、いったい、だれでしょうか。自己の力、自己の能力、自己の健康のほかに、困りの人々です。それがお金のことならば、銀行に行つて真情を吐露し、融資をたのむこともできれば、信賴するにたる人に援助を求めることもできます。話を聞き、事情を知つた銀行員・知人・友人は、その人の信念と熱情に心を動かされて、お金を貸してくれるでしょうし、そのほか、できるだけのことをして助けてくれます。

このように善意の人々に助けられてその苦境を切りぬける話は、私どもの社会に数多くみられます。立派な人間は、他の多くの成功者と同様に、他人の心の中に火をつけることのできる人であるといつても、過言ではないでしょう。

他人の心を動かすのは、その人の信念であります。

「肥つたぶたになるより、瘦せたソクラテスになれ」といつたのは、ジョン・スチュアート・ミルです。人間は、自己の信念を捨てて豊かな生活にひたるくらいなら、たとえ生活に窮しても信念を貫いたほうが人間らしい、という意味であります。

「この仕事に自分はすべてをかける」といえるものを持つことが大切です。しかし、この信念は、決して一時的なものであつてはなりません。たえず信念を強め、燃えつつけさせねばなりません。たえず燃えるとき、多くの人々がそれに共感し、動かされますから、人の心に火をつけ、人を奮立たせることもできるわけであ

ります。

自己と他人、自己と幼稚園、自己と家庭等々、私どもの社会は、たくさん的人的關係の上に成り立っていますが、自他の利害が一致しないときには、自己を殺しても他の人のために生きるだけの強い信念がなければなりません。そういう強い信念で他を愛し、ほかの大きい共同体を愛するようになるなら、人の心をうち、共鳴させ、共感をいだかせるようになります。

フランスの作家であり、文芸評論家であるロマン・ロランは、『トルストイの生涯』の中で、「愛は、それが自己犠牲であるときのほかに、愛の名に値しない」と述べています。

教育も仕事も事業もすべて同じで、自己の仕事に対する愛と信念、情熱に人はうたれます。そのとき、仕事は円滑に運ぶよう、援助の手をさしのべる人が必ず出てくるものです。

セールの仕事に誇りを持ち、セールを愛しているセールスマンには、お客のほうにセールしやすいよう手助けしてくれると聞いています。セールの秘密は、「お客にセールを手伝わせよ」ということにあるといわれていますが、これは信念のしからしむるところであり、銘記すべきであります。

人間の生活は、常に自己中心的に展開されてゆくものですが、他人や仕事を中心にして生活を展開してゆくならば、おのずから道は開けるものです。しかして、人の心の中に火をともしずには、「ともに暮らす」共同生活が最高にして、最良であります。悲喜哀歓をともに分かち合う気持ちがいかに通じてはじめて、火だねはつきりに人の心に点火してゆきます。

聖ポーロは、この地上にキリストの愛の火をともしつづけるために一生を歩む決意で生活し、それ以外には何も望みませんでした。私どもは、暁星幼稚園に学ぶ園児の一人ひとりの心の中に、この火をともしつづけたいものです。そのためには、私心を殺した愛の火が燃えつつづけていなければなりません。

終りに——夏休みを有意義に

皆様、なにとぞこの火を燃やしつづけながら、夏休みを有意義にお過ごしになり、実り豊かなものにしていただきたいと思います。

なお、私はマリア会の総会に出席するため、約三か月、留守にしますので、誌上をおかりして、暑中の御見舞いを申し上げます。

「ボン・ヴァカンス!!」

(一九七一年八月二十八日「エトワール」)

## ご降誕の原点にかえつて

人口三十五億のこの地上、全世界に、せわしない師走が訪れました。木々の紅葉を觀賞したのも、ついきのうのように思われるのに、小春一転、のめり込むように冬となり、街を行く人々も外套のえりを立てて、なんとなくあわただし極月風景です。

さて、現今の変動激しい社会を直視するとき、価値観の相違が親子の断絶を生み、人々は相互不信に苦しみ、そこにあるのは、利己主義と虚無主義、不安・糜の泥沼です。愛のない、進行のないところに真の平和・幸福もありえないのであります。しかし、この師走こそ、喜びの福音——メロディーの流れるときであることを忘れてはなりません。

全世界の信者は、クリスマスを祝い、謙虚に自己を省み、神の子としての三省と、今後を生きる決意を新た

にすることでしょう。未信者の心にも、何か楽しい、神の愛のかげりがしのび込むのではないのでしょうか。

子どもたちが、「ジングルベル、ジングルベル……」と無邪気に明るく歌うときにも、神のお恵みが心にしみるものです。

全世界がクリスマス一色になるこの十二月を、私たちは主体的に受けとめ、大いなる喜びと感謝の月にしたいものです。

キリストは、「私を信じる人が闇にとどまらないように、私はこの世に光としてきた」とおっしゃいました。クリスマスは、この光を賛美する荘厳な儀式であり、喜びのうたげでもあります。

キリストのメッセージは、断罪のメッセージではなく、救いの、解放の、喜びのメッセージであります。

聖夜、貧なるがため、夜も眠らないで羊の番をしていた牧童たちと同じような境遇にある人も多いことでしょう。この貧しい人に、また、心の痛む人、戦争のために苦しんでる人、正義に飢えかわく人の心に、幼子キリストがお生まれになるように祈りましょう。

そして、まずしい馬小屋に、子どもの「かたち」をとって現れたご降誕の真の意味を理解し、愛ゆえに神が人間とられる、この驚くべき玄義を、謙虚に、深い信仰と大いなる愛をもってかみしめねばなりません。キリストが身をもってお示しになられた素直さ、善良さを、わが心として生きるように努めたいものです。

クリスマスを迎えるにあたって、私たちは、このご降誕の原点にかえることがたいせつです。ジングルベルの狂想曲ののって、三角帽子が乱舞する街の喧騒と狂態は、私たちと無縁のものであります。静かな祈りと反省の中に、ご降誕の大いなる愛と喜びにひたりましょう。そしてキリストが、私たちに望まれる改心に努め、善業の実行にまいしんじましょう。

十二月二十五日、この日私たちは、心の鐘を高らかに鳴らしたいものです。砂漠のような都会で、生活に疲

れ、人間不信の中に生きていく多くの人々の心に、「私たちのために、きょう救い主がお生まれになりました」と誇り高く知らせたいと思います。事実、神の子キリストとの出会いなしに、私たちの真の生き方はありえないのです。この聖なる月に、邂逅のもつ意味に思いをはせ、改めて確認したいものであります。

(一九七二年十二月「エトワール」)

## 父権の回復を

父たちよ

あなたたちの子供を

怒らせることなく

主に従って

規律をもつて育て

訓戒せよ

(聖書のことば)

父親、それは家屋における大黒柱です。経済的にも、一家の支柱であり、家庭生活の中心です。また、精神の拠り所でもあります。困難、障害に出会ったとき、子どもの教育に関しても、つねに、中心となって尽力す

る。それが父親であるべきです。

現代は、この父親の果たす役割の大きさを、再認識する必要があります。ときおり、父親喪失がもたらす教育上の悲劇が、新聞をにぎわすことがあります。教育にたずさわる者として心が痛みます。

ユダヤ人の父親は、タルムード(教典)や、トーラ(旧約書)を、よく学びます。その子が三歳になれば、教えます。

みずから学ぶことによつて教える、この勤勉こそ、まさに、範とすべきです。

しつけにおいても、厳しいものがあります。サバト(休日・土曜日)になれば、テレビ・ラジオを見ません。ステレオまで止めて、家庭生活、一家の団らんを楽しみます。食事のときも、父親が中心となり、お祈りをし、パンの祝別からぶどう酒の分配までします。そして、歌をうたい、食事を楽しみ、平和な家庭を守っています。「ながら族」など、かれらにとつては無縁です。いや、無縁どころか、テレビやステレオなどは、ときには否定されるべき、文明の利器でさえあります。これは、「むちを惜しめば、子どもを損なう」道理を、よく知っているからであり、父親としての、「在るべき姿」を、わきまえているからでもあります。子どもは、父親の生き方にならない、その愛のむちに耐えるものです。したがって、子どもの甘えの構造の中には、父親否定の悲劇性はありえません。

「王国を統治するよりも、家庭を治めることのほうが、むずかしい」とは、フランスの哲学者モンテーニュのことばです。一家の中心となり、父親を確立し、平和な家庭維持に努める、このユダヤ人の父親の姿に、今日を生きる父親のあるべき姿を見るのは、私一人でしょうか。今こそ、私たちは、父親の役割を再認識し、父親の回復を図るべきであると、思います。

(一九七八年六月一日「エトワール」)

